

## 「オーロラを感じてみよう!」

～カメラのセンサー、そしてあなたの感性で～

中垣 哲也

### 1. 宇宙の繊細な光の舞をカメラでとらえる

私はオーロラを追いかけて10年になります、その前半はカメラの中にフィルムが入っていました。寒さで凍り巻き上げる際に切れてしまったり、空港のセキュリティーチェックで取り扱いが大変でした。オーロラの撮影は、暗くてなかなか写らず、限界ぎりぎり、写るか写らないかの感がありました。暗闇で繊細な光を放って踊るオーロラの光跡を時間をかけてフィルムの乳剤面に蓄積していたために、



フィルムでは数秒～数十秒の露出時間が必要だった。  
それは「特殊な発光体の光跡」  
2003年2月カナダ・イエローナイフ

思いがけない映像が得られる利点はありましたが、人間の視覚で感じた世界とは別物と言えるのです。

昨今のカメラの進歩は目覚ましいですが、特に以前のフィルムの役目をするセンサーは超高感度化され、まるでオーロラ撮影のために開発してくれているようなありがたい気持ちです。この記事の中に登場する写真はカメラのセンサーが感じた光が映像になっています。感じ方は人間の視覚と明らかに違いますし、カメラによってもかなり違ってきます。肉眼ではどうかと言いますと、その神秘の光はもっと淡く、透明感があり、オブラートで包まれるような気持ちよさがあります。



2011年頃の撮影機材。  
最近のカメラは低温でも  
何時間も働いてくれる  
頼もしいパートナー。

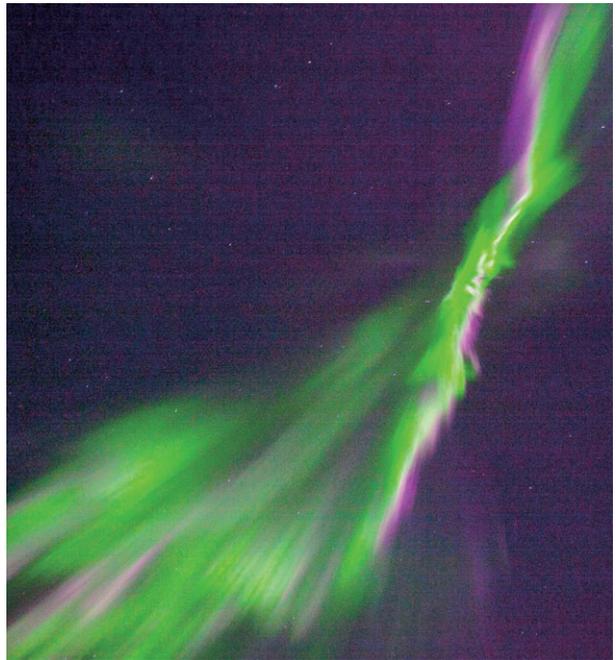
## 2. 感性で感動するオーロラ

北米や北欧のオーロラ鑑賞地では、多くの日本人が夜空を見上げて歓声を上げています。オーロラという地球上でもっとも美しくダイナミックと言われる自然現象を目の当たりにして感動しているのです。オーロラという光は、目の奥の網膜という視神経(脳細胞のひとつ)というセンサーがキャッチ、頭の後ろ側の脳に伝わり視覚を生じ、見えた！と感じているのです。オーロラの見え方は聴力同様に個人差はありますが、ほぼ同じように見えるはずですね。オーロラを「見えた！」と視覚を生じただけで感動して涙を流す人はいないはずですが、「感激の度合い」は人によってずいぶん違います。これはその人固有の「感性」というところのセンサーの感受性が千差万別だからです。オーロラを見に行くなら感性を豊かに育て臨んだ方が感動しやすいのだと思います。たとえば宇宙のこと、太陽のこと、極北の自然のこと、野生のこと…日本にいても書物やネットで情報を集めたり、科学館に行って疑似体験したりすることで気持ちが高めることができますね！

自分の頭の真上でオーロラのカーテンが揺れている！  
自分めがけて光のシャワーが降り注いでいるのだ!!  
でも決して地上の人間がオーロラの光を直接浴びることは絶対はない。  
2011年3月  
アラスカ北極圏



オーロラが活発になりシャッターチャンス到来。「さあ、来い！」  
自分にもスイッチが入る瞬間。  
2011年4月 アラスカ北極圏





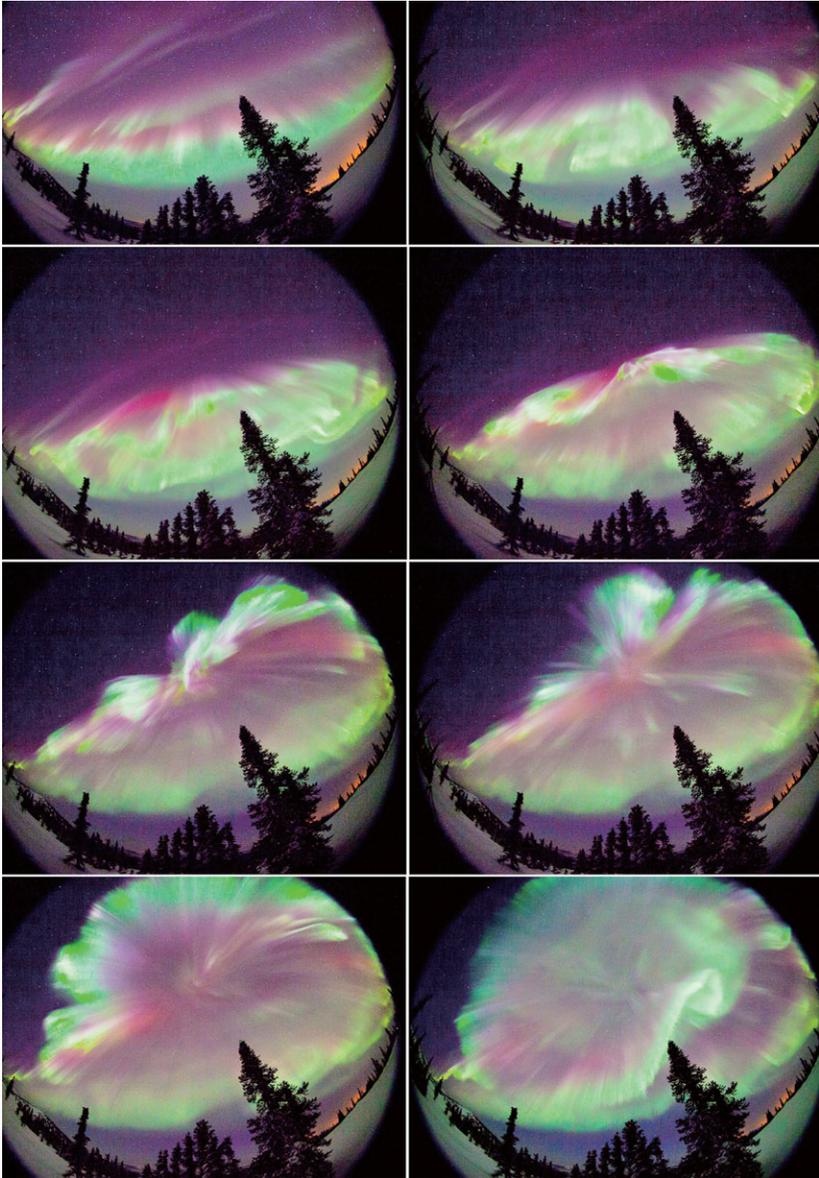
宇宙と大地が融合。  
風のない静かな秋の夜は、そんな  
贅沢を体験できるかもしれない。  
2010年9月  
カナダ・ユーコン準州



オーロラの色は限定的。緑色に光るのはこの  
惑星に植物があり酸素がある証。  
知的文明が存在する可能性を宇宙人に教えて  
しまっている？  
2010年9月 アラスカ北極圏



オーロラの活動は気まぐれ。おとなしくほとんど現れてくれない夜もある。  
お祭りのようににぎやかな当たり日もあるが、そんな夜はあっという間に朝が来てし  
まう。 2011年8月 アラスカ山脈付近



オーロラが見せる決定的な瞬間。  
恐怖と華麗が共存するこの「オーロラ爆発」はきわめてまれに起るが、最近の太陽の活動期にはしばしば体験することができた。  
死ぬまで忘れられない数少ない光景。  
2011年3月 アラスカ・フェアバンクス近郊

オーロラ撮影に関するよくある質問にお答えします。

## ●オーロラを撮影している場所は？

米大陸の北西部、アラスカやカナダのユーコン準州ですが、簡単に言うと地球のぼぼてっぺんの方です。もう40回くらい通ってしまいました。

## ●オーロラを撮影するようになったきっかけは？

23年間、札幌の大学病院で放射線技師の仕事をしていましたが、数年に一回程度お休みをいただいて、満天の星空に逢いにニュージーランドへ通っていました。2001年に行ったとき、思いがけず南の地平線に神秘的な赤いオーロラを見てしまいました。きれいというよりは、星空がピンク色に染まっていてちょっとあり得ないような光景、不思議そのものでした。魔性にとりつかれた瞬間です(笑)



秋は寒くもなくオーロラを楽しめる季節。水面に映るオーロラを撮るために何日もチャンスを待つ。

## ●オーロラを撮影する醍醐味は？

極地では、きっと誰かが星空というキャンバスに自由に気まぐれに光で絵を描いているんです。しかも決して同じようには表現しないので、出逢える光景は「一期一会」。それを撮影するという事は、どの瞬間をどのように切り撮るかで表現できる。だから撮影者の意図でいろいろと表現できることが面白いです。

## ●オーロラをどのように撮影しているのですか？

おいしい獲物はすぐに逃げられてしまうので、チャンスの時は必死に空を360度監視します。オーロラを撮るということは首が自由に動くということが大事なんです。オーロラの動きなど様子を見ながら、景色の中で絵になるように、走り回って場所を移動したり、レンズを交換したり、自分の行動がそのまま表現されますので、寒くても汗をかきながら工夫を凝らし続けます。一期一会ですから、後悔ないようにベストを尽くします。

## ●オーロラの魅力とは？

私にとっては魔性。なので、これだってという言葉が見つかりません。気がついたらそこから抜けられなくなっている。…豊かすぎる文明を離れて、カリブーやグリーズリーが命をつないでいる太古から何も変わらない姿をしているアラスカの自然の中で、時にはマイナス40度をも下回る過酷な世界ですが、夜になれば見渡す限り360度、途方もなく広い宇宙の中に自分がいます。もうそれだけでも十分気持ちがいいのですが、太陽からはるばる旅をして来た太陽風という超強力なエネルギーを持つプラズマが地球磁場に誘導されて自分の頭の上に降り注ぎ、生き物のように揺れ動く。太陽表面の出来事が、地球の極地の大気というスクリーンに映しだされる究極の宇宙劇場なんです。もしオーロラという自然現象が「ただきれい」という感じ方しかできないなら、わざわざ数十回も地球のてっぺんまで遠征しません。宇宙の中で、太陽系の中で、地球の上で、私たちはたまたま奇跡的に水も空気も快適な温度もある環境の中で生かされているんだという実感がこみ上げてきます。いまこうやって地球に生まれて本当に良かったって謙虚になれる。同時に自分がいかに小さいか、無力か理解できます。それはあまりにも小さい。自然の中でやはり人間はひれ伏すしかないし、地球というありがたい惑星に生かしていただいているなら、その摂理に基づいた生き方をしなくてはならない。…オーロラに限らずその大自然のすべてに畏敬の念を覚えた時、自分の心の奥でエネルギーが生まれてくるのがわかります。自然の中で自分を客観視できるようになり、50才を超えてから最近わかったこと。幸運なことに自然のメッセージを受け止める「感性」を持てたこと、そしてその感性は「感動」によって新たにプラスのエネルギーを与えてくれることでしょうか。私の活動の原動力そのものです。いまから思うと、その感性は中学生くらいから、たとえば夕日や星空という身近な自然から、また大好きな音楽から育んでもらったんだろうと思います。感動する経験が多ければ多いほど、感受性の高い感性を備えることができます。今の私はあまり少年時代と変わりませんが、今年は大きな彗星が二つもやってくるので、わくわくドキドキします。宇宙の魅力というのは、私たち誰もが潜在的に持っている感性を開花させる起爆剤なのかもしれません。



### 著者紹介 中垣 哲也(なかがき てつや)

1961年生まれ、札幌在住。2007年に放射線技師から転身、現在は極北取材、また日本全国を回り上映会や講演会、写真展などを開催。『奇跡とも言える地球の素晴らしさ』のメッセンジャーとして活動。3.11以降、日本人が失ってしまった自然への畏敬の念を感動で伝えることを目指す。